

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 5 8 号

2023 年 10 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より (3)

パウロ、バルナバ、テトス

「その後 14 年たってから、私はバルナバと一緒に、テトスをもつれて、
再びエルサレムに上った。」(ガラテヤ 2.1)

ある注解者は、パウロを中心とするバルナバとテトスの 3 人を、すばらしき 3 人組と言っています。パウロは直接神から、最初に啓示をうけた人でありま
す。即ち、恵みを受けた元祖です。バルナバという人は、敵であったパウロの
福音を認め、エルサレムの中心人物に紹介した人であります。現に 14 年間で
こういう結果が生まれたと、その証人としてバルナバを連れて行きました。パ
ウロの説くところが如何にただしく、いかに事実であっても、このバルナバが
いなければうまく行かなかったと思います。バルナバは非常な人物で、本部で
も非常に信頼されていた人のようです。彼は、本部の様子を知り、また、使徒
としてのパウロをよく知っておりました。その人をよく知っていると言生こと

は非常に大事なことであります。己を知る、敵を知ることが大切です。このバルナバなくしてパウロの成功はなかったと思います。もう一人のテトスは異邦人であり、商人でした。パウロは人間の標本を持って行きました。論より証拠。証拠を見せられたら大抵頭が下がります。この頃のクリスチャンが無力であるのは、クリスチャンという証拠が無いからです。証拠がなければ、人は信用しません。

福音という字

「福音」という字をパウロは 60 回も使っております。ペテロ前書、黙示録にそれぞれ 1 回、マルコ伝には 7 回、マタイ伝には 4 回、使徒行伝には 2 回、ルカ伝には出て来ません。全部合わせても 10 数回のみですが、ガラテヤ書には 60 回も出て来ます。これで、福音という字はパウロが作った言葉であることが分かります。福音の元祖にふさわしい。その福音があなた方の中に留まるように私は譲らなかったと言っています。パウロはテトスの割礼に断固として反対しました。

第1の感想—相手を知る必要がある

ユダヤ教というものは割礼の必要性などを言いますから、もしパウロが現れなかったならば、キリスト教は世界宗教として伝えられなかったと思います。ところが、このユダヤ人と異邦人との間の破るべからざる壁を破ったのはパウロです。ただ信仰によって救われるという神の恵みをもって壁を破りました。これは非常なる事実を示していると思います。これは信仰の問題だけではありません。それには、パウロはユダヤと異邦との双方に真剣に取り組んでそれを知っていました。そのため、宗教の本当のところ、即ち、福音が分かったのであります。こういう人が必要です。君達も同じことです。自分だけが良いと思っただけです。相手を知る必要がある。相手を知らずして喧嘩は出来ません。パウロという人はユダヤ教についてよく知っておりました。そこへバルナバと言う学者が現れました。この使徒会議の意義は極めて重要と思います。世界においても、本当に、国際での話し合いに双方をよく知っていなければ問題となりません。パウロは「ユダヤ人と異邦人との間に区別はない、神の恵みによって救われる」と言いました。これはパウロの専売特許であります。この言葉は実に深い言葉です。これを現代にすれば、「信者と未信者との区別なし」ということとなります。信者は注意を要します。

第2の感想——土台の信仰

パウロの宗教的な展開についてであります。パウロは、ユダヤ教を十分知った上で、ユダヤの唯一神教を土台として福音というものを取り入れました。この土台の信仰が無かったならば、福音は迷信となり、お稲荷さんの信仰と同じになってしまいます。この十字架の贖いというものを従来信仰の上にながちり置きました。これはパウロの卓見であります。

アンテオケアの重大性

アンテオケアの重大性です。古い革袋には新しい酒は入らない。我々もそうです。これをすべきだ、あれもすべきだ、と頑固になっていたら、福音は入りません。ユダヤ人に入らずして、むしろ異邦人に福音が入った。私はこの意味において、東京という場所は、福音の入る場所として、重大な場所であると確信します。この地に内村鑑三は生まれました。鑑三は「福音だけで救われる」ということをこの地で明確にしました。これは何事にもまして大きな出来事です。何十年経っても、我々に福音が分からないのは、自分に堅く固まっているからであります。私は東京がアンテオケになることは、21世紀に証明されると信じています。諸君、これが本当かどうかは歴史が証明します。

キリスト・イエスを信じる信仰によって義とされる

「わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人なる罪人ではないが、人の義とされるのは律法の行ないによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによって、だれひとり義とされることがないからである。」（ガラテヤ 2.15-16）

誠に註解を要しないほど明瞭に書かれております。これはペテロの論争の続きと見てよい。そうですから、「わたくしたち」とは、パウロとペテロと見てよい。我々は生まれつきユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではない。特に、ユダヤ人は熱心に律法を守りました。そうですから、パウロやペテロという人は、異邦人と比べれば、道徳的水準は高い。…自分達は異邦人のような程度の高い罪人ではないと。しかしながら、人の義とせられるのは、律法、行いによるのではなく、イエス・キリストを信じる信仰によることを認めて、わたしたちはイエス・キリストを信じた、と。パウロにとっては、「義とされること」が中心の問題となっていました。即ち「義とされる」とは「神に義と認められて、神に受け入れられて、神の子とさせられる、救われる」ということであります。永遠の生命を頂いて、救われるのは律法によるのではない、と。ただ、イエス・キリストを信じること。この「ただ」という字に注意してください。

4つの書簡の重要性

「わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのはもはや、私ではない。キリストがわたしのうちに行きておられるのである。(ガラテヤ書 2. 19-20)

昭和 36 年から 6 年間にわたり、パウロのロマ書、コリント前書、コリント後書およびこのガラテヤ書を勉強してきましたが、これらの書では、他の書簡で言っていないことを言っています。信仰によって救われる、という同じ内容のことですが、4つの書簡いずれも、その言い表わし方が違います。ですから、その頂点を知るためには、これらの書簡を知る必要があります。その4つの書簡を共に知る時に、パウロの信仰の全貌が分かります。ロマ書には、「誰もが自分自身のために生きているのではない。生きているのは神のためであり、死ぬのも主のためである」という言い表し方をしています。このガラテヤ書の言葉でも、パウロの生き方は、イエス・キリストを信じて生きていると言っています。律法に寄って生きているのではないと。この 19 節と 20 節は、パウロの信仰を一言で言い表しています。原文では、「生きているのは、自分ではなくして、キリストが私において生きているのであると書いてあります。

ここで、内村先生のこの箇所の講義を聞いていただきます。

内村鑑三「ガラテヤ書の研究」(ガラテヤ書2章20節)

○これはパウロに由りて発せられし最も著しき言葉の一つである。基督信者の生涯の何たるかは最も簡単に、而も最も徹底的にここに言い表はされたのである。信者の生涯をつづめて言えば是である。是以外に信者の生涯はないのである。

○「我既にキリストと共に十字架に釘けられたり」。信者の生涯はキリストの生涯である。信者はキリストの御生涯に於いて自分の生涯を見るのである。信者はキリストと共に苦しみ、共に十字架に釘づけられ、共によみがえり、共に栄光をもって顕わるるのである。苦しみを共にし、喜びを共にし、恥辱を共にし、栄光を共にす。勿論患難ばかりではない、歡喜もある。然れども歡喜相應の患難がある。「我らもし、キリストと共に死なばまた彼と共に生きんことを信ず」パウロが他のところにおいて言えるがごとし(ロマ書6章8節)

○「我既にキリストと共に十字架に釘けられたり」である。キリストが死に給いし時に信者は既に死んだのである。一度肉に死んで再び復生(いきかへ)らないのである。我は死んだのである。然し死なないのである。「キリスト我に有りて生けるなり」である。1の生命が去って他の生命が入り来たったのである。我は死してキリストが我に代わりて我が裏に生き給ふのである。基督信者は基督である。キリストが信者に代わってその生命を営み給う者、その者が基督信者である。

内村鑑三先生の注解（続き）

○ 我が今日の生命は信仰である。我が救いは完成されたのではない。完成の途上に於いて在るのである。而して完成を待ち望みつつある今日、我は信仰を以て生くるのである。「我は既に死んだ、キリスト我に代わりて我がうちに生き給う」。それは信者の生涯であって、やがて事実となりて現はるべきことである。然れどもそのことの実現するまでは、我は神の子を信じて生くるのである。即ち我を愛してわがために己を捨てし給いし彼は必ず我に在りて、我を化して、己が属（もの）となし給ふことを信じて生くるのである。即ち、ヨハネが言うた通りである、「愛する者よ。我ら今すでに神の子たり。後いかん未だ現れず。彼現れたまわん時には必ず神に肖（に）ん事を知る」と。（ヨハネ第1書3章2節）ヨハネの「知る」はパウロの「信ず」である。今は見ずして信ずるのである。握らざるに知るのである。

内村鑑三先生の注解（続き）

ガラテヤ書のこの1節に信仰上の3大事実が含まれている。これを左の如く判別することができる。

- 1 我既にキリストと共に十字架に釘けられたり（根本的事実）。過去
- 2 最早我生きるにあらず、キリスト我に有りて生ける也（理想的事実）。未来
- 3 いま我肉体に有りて生けるは我を愛して我が為に己を捨てし者すなわち神の子を信ずるによりて生ける也（実際的事実）。現在

即ち、死—生—信である。死が始めである、生が終わりである。信が途（みち）である。そして信者は初めてキリストを救い主と認めし時に（バプテスマを受けし時ともいうことができる）己れに死し、今や復活栄光を目指して進みつつ信仰の生涯を営む者である。

（この三つのことがはっきりしていないと、じきに自分がキリストであるなどと言い出して、頭がおかしくなる人が出て来ます。我々はイエス・キリストを信じることによって義とされる。肉体はあくまで小西芳之助です。不完全です。これをはっきりしておく必要があります。—）

内村先生の感想（続き）

理想と云い実際と云ふ。人に在りては二者は互いに相反する言辞（ことば）である。理想とは、到底達し得ざること、実際とは罪の人が常に為すことである。然し神にありては然らず。神に在りては理想は実際である。彼は想う事は必ずこれを遂げたまう。パウロが彼を証して *dunamos* 「可能となすもの」と云いしはこれが故である。理想を実現し得る者、神は其れである。「汝等の心の中に善きはたらきを始めし者、之をイエス・キリストの日にまで完うすべし」とあるに由りても判る。（ピリピ書 1 章 6 節）（—我々はそういう信仰を持っています。—）

そして信仰は神の理想実現の信仰である。キリストは我を愛し、我が罪の許されんがために、許されて限りなき生命の恵みに与かせんが為に己が身を捨てて十字架の死を遂げたまへり。我は、その愛と愛の故受給いし苦難とを信ず。その信仰が救いの完成を待ち望む我が今日の生涯である。そして、この信仰は空しからず、必ず実現せらるるを信ず。故に信仰の生涯なりといえども、実現の生涯に異ならず。故に人のすべて思う所にすぐる平安があるのである。（パウロの生涯は、信・望・愛であります。信は現実の生涯、望は実現の確信であります。）

内村先生の解釈

これが内村先生の解釈であります。

我々は信仰において、十字架につけられて自己に死に、神の子とせられ、永遠の命を与えられた者であります。そうですから、キリスト来給う時に、必ず我々は復活して、基督が我がうちに住み給う。復活の状態です。これが我々の望みです。我々はこれを望んで、そして、この世では、信仰によってキリストと共にあります。そのキリスト共にあるという信仰は復活の望みです。こういうことは、諸君には興味ないでしょう。興味ないけれども、これが本当の人を動かす原動力であります。これがパウロを動かしました。パウロはこの世のものは、このキリストの賜物に比べれば糞土の如きものであると言いました。